文化財保存活用課　　令和５年７月 20 日

丸亀城管理室だより　№１８

令和５年度の予定

石垣復旧工事が始まってから６年目に突入しました。

今年度は石垣の解体・回収工事がようやく終了する予定です。そのため、今後は石垣の積み上げに向けた新石材の製作や、復旧設計を行うなど、様々なことを協議し、決定していく大事な年度になります。

【石垣解体回収工事】

- ブルーシートの下に一部残っている、崩落土や崩落石の除去・回収を行います。
- 解体回収した石材と、場内グラウンドで石材調査を行い、石材置場へ運び出した後、積み直し時まで保管します。

【新石材製作】

- 崩落により割れたり砕けたりした石材は再利用できないため、備讃瀬戸の島々から新しく石材を調達します。
- 新しく調達した石材は、元通りの形に加工して積み上げます。

【復旧設計】

- 復旧設計について、石垣復旧専門部会を開き、有識者の委員と復旧工事に向けた詳細な協議を行い、様々な事項を決定します。
- 専門部会で決定した内容について、文化庁より承認を受け、石垣積上げの復旧工事に着手します。

D 面追加解体の終了

昨年６月７日に着手した三の丸石垣Ｄ面（南面）の追加解体は、今年４月 19 日に無事完了し、その下方斜面の崩落土や崩落石の撤去・回収も５月 20 日までに終わりました。これをもって、平成 30 年末の応急対策工事から４年余りかかった一連の現地土木作業は、ほぼ終了となりました。あとは、三の丸石垣の根石すぐ下方の斜面に、崩落土や崩落石が一部残っている箇所があるため、撤去していきます。

工事現場の動きは少なくなりますが、今後は石垣積み直しに向けての協議を進めていくようになります。

D 面の深部（帯曲輪石垣に埋め込まれた地中部）では、特に石の破損率が高くなります。この石も、前後に断ち切れています。

【D 面 40 段目の解体状況】

【解体前のＤ面最下段（48 段目）】

解体・調査終了後はモルタル吹付して法面を保護しています。

【現在のＤ面】

江戸時代の石垣補修時の基礎構造

三の丸坤櫓の石垣は、正保２年（1645）～慶安２年（1649）の間に崩れ、明暦３年（1657）頃までには補修したことが歴史資料から推測されます。Ｄ面３７段目は、その時に補修されたと想定される箇所の最下段です。そこの解体を行ったところ、下面に胴木痕を確認し、またその下の 38 段目の石材の上面には、胴木設置用の溝状の加工を確認しました。

これにより江戸時代の補修時は、石を積み上げる際に下に溝状の加工を施し、２本の胴木を置き、その上に築石を積み上げていたことが分かりました。

【Ｄ面 37 段目】

【Ｄ面 38 段目・胴木設置用に加工された石】

【Ｄ面 38 段目・旧隅角部】

丸亀城の石材の違い

現時点で、11,700 個以上の石材を回収しています。丸亀城の石垣に使われた石材の産地は、資料が残っていないため詳細は不明ですが、備讃瀬戸の島々では、江戸時代から石材を切り出しており、丸亀城からも遠くない距離にあるため、このあたりから調達されたと考えられます。

石垣復旧工事で回収された石材の表面を観察すると、黄色く粒が粗いものが最も多いですが、黄色く粒が細かいもの、白く黒い粒が細かいもの、白く粒が大きいものなど、様々な特徴が見られます。石材は産地によって色や粒の大きさに違いがあるため、丸亀城の石材は、一ヶ所だけでなく様々なところで調達したのではないかとも考えられます。

【黄色く粒が粗いもの】

【黄色く粒が細かいもの】

【白く黒い粒が細かいもの】

【白く黒い粒が大きいもの】

第 74 回丸亀お城まつり開催

５月３日・４日に、丸亀お城まつりが開催され、２日間で約 23 万人が訪れました。

石垣復旧工事現場では、昨年大好評だった「石垣復旧工事ではたらく車に乗ってみよう！」のイベントと、工事現場内を見学できるイベントの２つを開催しました。特に、工事現場内を見学できるイベントでは、全国２位の 31ｍの高さを誇る三の丸石垣の根石（土台の石）を見られる貴重な機会とあって、市内外から多くの方々にご参加いただきました。

作 成：丸亀市教育委員会 文化財保存活用課
丸亀城管理室 TEL0877-23-2107